



VOL.17 No.3 The University of the Ryukyus Library Bulletin 1984.9.1

## 読書の環境工夫と自分子

—— 思い出せる読み方を求めて ——

水野益継

読書論の帝範は、読書家の数ほどに尽きないものである。今や本の氾濫時代にありせば、何を讀むべきか。果てしなく《点の情報から面の情報》まで読書空間の広がりを見せている。

そこにあって、絶えざる読書情報の蓄積、いわば知的再生産が要求され続ける現代のさなかにあって、自分なりの書齋から発想を起しつつ、そしてあらゆる場所を自分の『書齋』として工夫しうる精神構造を形成していくには、どうあるべきか。例えば芥川龍之助も「運命は性格の中にある」と断ずるが、「何事かを成し遂げるには、その人の才能ではなくて、性格である」との至言を吐く司馬遼太郎の言葉にもみるように、いい読書性格を工夫醸成し、そして自分が必要時にフィットさせ、それらを的確に検索できるような、即ちいつでも思い出せるような読み方をどのようにすべきか、常々主体的に、切実に考えて読み上げることもまた重要なことではなからうか。

### 目

読書の環境工夫と自分子……………水野益継……………	1
図書館の上手な利用方法……………山里盛貴……………	5
日曜、祭日開館について……………	5
岩野泡鳴と『宮古島旧記』……………松原敏夫……………	6
特殊資料の目録カードが出来ました	
……………本郷清次郎……………	7
西脇昌治文庫寄贈さる……………	9
故伊波直朗教授蔵書本館へ寄贈……………	9

### 次

本学教官著書寄贈コーナー……………	10
学位論文・著作物等の寄贈についてお願い……………	10
映画フィルム・ビデオ等の資料提供について	
お願い……………	10
図書館・施設・設備の利用案内……………	10
ブラウジングコーナー……………	11
図書館事情……………	11

因みに故人も語る「一人（いちにん）ニヨッテ国ハ興リ、一人ニヨッテ国ハ亡ビル」（蘇老泉）といった言葉が真実であれば、読書こそ極めて《一人的営為》に外ならないところから、平素、読書論の基柱（the principal pillar）も自分なりに押さえておかねばならないことであろう。大方、現時の読書諸子に天家国家のみを作興せんとする明治の情熱家たちのような時代は過ぎたりといえども、何かと自分の空想を瘦せさせまいとして、天性的な眼光速度を大切に、ジワジワ万卷に喰い入る本の虫は、案外に卑近で多いことを知るのである。しかし、その中でも、昔から「論語読みの論語知らず」との揶揄もあるように、本を読みあさることもむろん大切だが、本よりも、自分の体と冒険心を駆使しつつ、そこで経験したことを大切に、そこを原点に新しい発想を得て、独自の学問を展開する行動派の人々もある。

オーソドックスな読書論の系譜といえるものには、有名なエマーソンの三原則があり、(1)一年を経過していない書物はいかなるものも読まぬこと。(2)有名な書物以外は読まぬこと。(3)自己の愛好する書物以外は読まぬこと。

といった在来の権威主義的で自己享乐的な教養主義があるけれども、これらに対しては、多分な批判もなされている。例えば、「古典は基本であるとの考えは誤りだ。基本は自分流に築け。人がいやしくも一つの個人だというならば、それは質の独自性のゆえにそうなのだ。人は現代に出版されたものをまず読むべきだ。自分がそこに生き、参加している世界について知ること、これが何より肝心ではないか。読書はメシを食ったり、運動したりすることと同じだと思うがよい」（ヘンリー・ミラー）とか「読書はそれ自体としては平安な無言の現存であり、逸脱の鎮められた中心部、あらゆる動乱の中枢に存在する無言の《諾(ウィ)》である」（モーリス・ブランショ）などの考え方は実に実践派たちの読書哲学でもあり、いわば《書齋は男の城である》と青白く力んだ昔日の象牙の塔（The tower of ivory）の住人たちをあざ笑うかの如くである。

たしかに「人間の教養は読書と体験によって養われる」（夏目漱石）ともいわれるが、古来、より多くの人々が、自己の書齋に逃避する原因は、凡そ「冷ニ耐エ、苦ニ耐エ、煩ニ耐エ、閑に耐エ、激セズ、躁ガズ、競ワズ、随ワズ、以テ大事ヲ成スベシ」（王陽明）とする所にあったとされる。やはりその真髓は「まことの人間とは、自分の義務が要請される時と場合においてのみ、世界の舞台にあらわれなければならぬ。その他では、一個の隠者として、自分の家族の中に、わずかの心友とともに、また《自分の書齋の間に、精神の風土に》生活しなければならぬ」（安岡正篤）と説かれるが、いわば難解重厚な学術論文や「大学の講義なども大事だが、日常茶飯事の雑談の中には、教室ではきくことのできない人間くさい人生の哲理がある。いや、むしろ、理路整然とした講義よりも、日常の片言隻句の方に、真実が含まれているのではないか」（伊藤肇）とする活学の基礎を説くものもある。しかし、どんな本の中にも、その本を貫流して著者が言わんとする《ただ一つの生きた言葉》があるといわれるように、それこそ読書の契機が、趣味や教養や「資料を以て資料に語らしめる」研究などに依ったとしても、結局は、自分自身の持つ読書習慣と平素からの読破痕跡（果敢なる赤鉛筆の圏点ふりと書き込みと、抜き書きetc.）などを機能的に自分の思考のコラリの下で《新しい組み合わせ＝創造》を指向し、励行する以外に王道はなかり。即ち、必要な時に思い出せる読み方の日常訓練とも称すべきである。

ここでただ一つ学究としての覇道(The rule of might)とは、次のことではなかろうか。即ち、「読書家は、まず愛書家に始まり、愛書家は、いずれ図書館の主に余儀なくされる」といわれる主体的思想の賢持が必然的に要請されるのである。——何故なら「図書館は作られるものではなく、成長するものだ」(オーガステン・ビレル)とか「人は一冊の本を作るために図書館半分をひっくり返す」(サミュエル・ジョンソン)といわれると同時に、「文章の才だけでは作品を作ることはできない。一冊の本の背後には必ず一人の人間がいる」(エマーソン)とも説かれるからである。

さて、『読書三昧』、『読書三余』(読書に都合のよい余暇として冬、夜、陰雨の三つがある)、『読書三到』(読書の方法には、口到、眼到、心到があり、即ち口に余事をいわず、眼には余事を見ず、心を集中させて反復熟読すれば、専心その真意に到るとする)などのいい古された《読書ターム》もあるが、読書に没頭し「我レ三月庭前ヲ見ズ」との読書狂の故事を読んだときには、一人驚嘆したことである。しかし、その深奥に、実にわが肺腑を抉ぐられたことを思い出す。

曰く「習学ハ、マズ『不言』ヲ習ウベシ。始メハ勉強力制(りきせい)シテ、数日、一語ヲ発セズ。ヨウヤクニシテ数カ月、一語ヲ発セザルニ到ル。斯クノ如クナレバ則チ蓄ウル所ノモノ厚ク、養ウトコロノモノ深シ。言ワズシテ則チ己(や)ム。言エバ則チ経ヲ成サム」(季二曲)と。——即ち、われわれ庶民の生活感覚に翻訳していえば「人の是非を言わず、ただ花の開落を見るのみ」(醉古堂剣掃)ともいわれる、いわば《待ちの精神》にも通じるものであろうか。

このような温故知新、先人たちの学問論は多彩である。しかし、われわれは読書環境の工夫を失い、特に若い学究は、いつもそれらの発言に迷わされ、木だけ見せられて森が見えなくなる。そこで我々学究は、自分なりの蔵書の整序法とその読破実践プランを立てるべきであろう。

私はここに私小説的ながら、ロマンチックに後述の理由で自己の手の届く本棚指針を一つの指標(merkmal)に掲げてみただけである。即ち、「現代の読書のすすめ」とは何か。何のための読書論か。月並みに「知性と教養」の総合化のためだろうかなどと自問する。——すると誰かがコケッココと笑い出す。そんな高遠なことは、「方法より実践読破である」とするのである。しかし、方法なき実践は無価値であり、娯楽に転じて読書成果を問えなくなるからである。それは丁度、長く長く消えやらぬ秋の日の夕暮れに似て、蔵書購入法(図書館業務論)か読書方法論(ハウ・ツー実益論)かといった《鶏卵の先き争い》ともなり、蔵書と読書の発せ起原論に遡及する。即ち、ダーウィン先生か又はすぐれた図書館学の大家でも呼び出して聞いてみる以外、仕方のないことであろう。しかし、われわれの経験律の語るところに依れば、《本は在るから読まれるのである》とする基本書自費買込主義こそ学究の《机上の友》となっているのではなかろうか。

このように若しも具体的で「確実な知識」に根拠した「学問」なるものが、その結晶において、本当に人間の「糧」となるならば、それぞれに、読書の累積結果たるや輝かしい未来を持つ筈である。正しく生きるために質あるものを求め、その本源を訪ね、真実なるものが、万卷を通じて皆の共有物とならねばならない。特に「人生は一冊の書物のようなものだ。愚か者はペラペラと早く読むが、利巧な人は丁寧に読んでゆく。何故なら、それは、ただ一度しか読むことができない本である」(リヒター・Jパウル)とも喩えられるからである。特に人生論的読書論においてその実態を見せてくれるもので、その意味で古典的名著なるものは、人類の共有物であろう。人はそもそもどん

な場未に居ても、常に考える動物であり、「飲みながらさえ考えている人もいる」とキザにいい出す方もある程である。加うるに、自己の読書成果を、世の雑音をさけつつ、明日の稔りを考えて静かに「種を播く人たち」（真の教育者）もまだまだ健在だと語る人たちもある。

してみると、以上のような《現状》が眼光紙背に徹して、いまだ現存するとせば、次の読書訓は、私自身にとっても、これからの人生を何層培にも有益にしてくれるであろう。たしかニーチェも事物の偉大さとは、方向を与えることだと言ったが、つまるところ、すばらしき本の環境学又は自分学といえるものも、実は、のめり込むような方向を示唆してくれる書物との邂逅以外のなにものでもないのである。いま一度、「ほとんどの財界人でも一流なる人物は、例外なく読書家である」（城山三郎）ともいっているが、何故だろうか。古来、「太陽の下には新しいことは何一つない」との諺もあるように、次の最近読んだ前記伊藤肇氏の本に、「日常坐臥、身に襲いきたる人事の全ては、ことごとく歴史の中に、その前例がある。だから歴史に照らして考えれば、現代の新しそうな事象でもただちに解釈が見つかる。安岡正篤先生いわく、たいていのことは古典の中にある。何千年も経ているのに、人間そのものの根本はたいして変わっていない。時に自分が創意工夫して、偉大な人生を発見したと思う。しかしそれは大きな錯覚で、自分が無学なために、古典に載っていることを知らなかっただけのことである」とあるのを読めば、やはり読書こそは今日にあって、万年の知的宝庫であることを知るのである。蛇足ながら、ここに自分の好きな参考文献も並記して小論の結びとしたい。

#### 《私の好きな読書訓三題》

- ★ 読書とは自己の頭によらず他人の頭をもって思索することである（ショーペンハウエル）
- ★ 一事を考え終らざれば、他事に移らず、一書を読了せざれば他書をとらず（西田幾太郎）
- ★ 読書は人間を豊かにし、会議は人間を役に立つようにし、物を書くことは人間を正確にする（ベーコン）etc .

#### 《私の好きな参考文献三冊》

- ★ 『私の書齋』（現代の知性派41人の特写附シリーズⅠ、Ⅱ、Ⅲ、（竹井出版編）
- ★ 『講義のあとで』（碩学30人が語る学問の世界、日本リクルートセンター出版部編）
- ★ 『本の環境学』（紀田順一郎著、出版ニュース社）etc

（みずの ますつぐ：教育学部教授 法律学）

## 図書館の上手な利用方法

山里盛貴

昭和54年5月に図書館へ配置換えとなった。首里キャンパスの時代である。それから4年間整理係で仕事をしていた。その間に千原移転という大事業があった。

新図書館に移転すると並行して図書館作業も変転していく。本の貸出作業も手書きからコンピューターに変わり、出口の手荷物のチェックもBDSシステムに変わってからなくなった。

4年間いて得た図書館利用法を述べたい。まず本の探し方である。二階の閲覧カウンターの前に閲覧目録室がある。そこに著者目録、書名目録、分類目録、件名目録とあり、著者、書名、件名はABC順、分類は順次式で配列されている。それをめくると捜したい本がわかるようになっている。ままたまあるのだが正確な著書、書名はわからないが研究する問題を知っている場合は件名目録が便利である。又、最近ではコンピューターで打ち出した冊子目録（著者名、書名、分類）が用意されており、両方を併用すると大体の本は捜せると思う。

又、余り知られていないのが二階の奥にある書庫と、郷土資料室である。書庫には相当数の蔵書があり主に古書や全集物等であるが古い単行本も入っている。二階閲覧目録の目録カードにはあるが閲覧書架にはない本は大体書庫に排架されていると思ってよいでしょう。しかし平日は5時までしか開いていないので夜間しか時間がない人には不便である。郷土資料室には沖縄関係の古書、全集物単行本等があり入室（但し教職員のみ）させてもらってどういうものがあるか目を通しておけば参考になると思う。一階に降りると視聴覚室があり、奥の方にL.L.室がある。外国語（10カ国程）のテキスト、テープ等が用意されており、参考調査係へ許可申請すれば利用できるということである。しかし存在が余り知られていないのか利用者は少ないという。もったいない話である。

三階に行くと雑誌室があり世界15カ国以上、約3千種類の雑誌がおかれている。たいしたものがある。それだけの資料が揃えられているのだから利用法をよく知っていれば誰にも楽しめると思う。もし判らなければカウンターの参考調査係等に聞けば、懇切丁寧に教えてくれる。

最近では本の値段も高くなり欲しい本も手が出ない時がままある。そういう本は図書館で購入してもらおうのも一つの手である。但し読めるまでには少々待たねばならないが……。

専門職員でない私が何を余計な事をといわれそうだが図書館内では常識だが、図書館外では案外知られていないのではないだろうかという気持で書き綴ったものです。もし誤りがあれば指適して指導して下さい。

（やまざと せいき：理学部工学部 庶務係）

### 日曜、祭日開館について

図書館では試験期における日曜、祭日開館を次のとおり行いますので、ご利用ください。

9月23日（日） 13～18時  
9月24日（月）     ”  
9月30日（日）     ”

（閲覧係）

## 岩野泡鳴と「宮古島旧記」

松原敏夫

岩野泡鳴といえば、日本近代文学史の中では、明治期の自然主義文学者の一人というふうには考えられている。しかし、同じ自然主義文学者といっても、田山花袋といえば『蒲団』島崎藤村は『破戒』、『夜明け前』、徳田秋声は『あらくれ』『縮図』というぐあいに作家の名前と作品が即時に結びついて思い浮べられるが、泡鳴のばあいは何故か、その代表作というのが、あまりピンと来ない作家である。例えば河上徹太郎が「明治文学史を通じて偉大な小説は沢山あった。然し偉大な小説家は岩野泡鳴ただ一人である。」（岩野泡鳴に関するノート）と書いている。この文章は泡鳴の作品よりも、文学者としての活動に重点をおいていることに他ならない。また小林秀雄や中原中也が泡鳴の訳したアーサー・シモンズの『表象派の文学運動』から大きな影響を受けたり、山之口巖が「岩野泡鳴論」で思想的同調心を持って書いている処を見ると、泡鳴が意外な影響力を持っている事は確かである。つまり泡鳴はどちらかと言語の行動派であったし、他者への影響に自分の思想の喧伝を費やしているというフシがあったとも思える。

その泡鳴に、比較的余りよく知られていない詩に「宮古島もの語 嘉播の親」（明治32年）という珍しい詩がある。この作品は、

「第一 棕櫚の樹かげ  
わが 日の本 の おほ御国、  
南の海に 横たはる、  
宮古の島 は 狭けれど、  
あまた間切れ に 分たれつ。」

という書き出しで始まる。内容は知る人ぞ知る「宮古島旧記」の中の〈大巖伝説〉を叙事文体で脈々と綴ったものである。叙事詩だから、ほとんど作者の思想感情は入っていない。ただ伝説の素材を詩に改作したものに過ぎない。この詩について泡鳴は書いている。

「同年、泡鳴の物語詩『嘉播の親』が、雑誌『学窓余談』に連載された。その材料は『宮古島旧記』から取ったので、『棕櫚の樹かげ』、『石垣城』、『こすこすあかの瀬』、『白川浜』並に『いらかの上』の五軸、殆ど九百行から成り立っている。盲目の村をさ（城主）に、二人の孝女と三人の放蕩息子がからまって居る物語で、四行一節の七五調、宮古島の伝説と熱帯風景とが之に関連して出て来るのだ。平坦な叙事のうちに、老盲人の愛情と怒念とがよく現われて居る。」

同年というのは、明治32年のことであり、泡鳴26歳、時に肺結核を患い、また長女喜代を3歳足らずでジフテリアで亡くした時期である。この明治30年代というのは、叙事詩の全盛期であったという。日本の詩形式を変えたといおうか、当時の詩を変えたのは、何よりも明治15年に発行された『新体詩抄』であった。この東大の哲学者や社会学者、植物学者といういってみれば詩とは無縁な分野の人々が詩についての本を発行した事が、奇異な感じもしないではないが、それからの明治詩壇は誰も彼もが競いあうようにして、新体詩について発言したり、実作したりするのである。恐ら

く人一倍他よりも先んじて、新しいものを取り入れ、新しい運動の指導者=影響者たらんとした泡鳴も、そのひとりであったにちがいない。

その『嘉播の親』に触れつつ、日夏耿之介は次のように書いている。

「岩野泡鳴は、早く第一期の後期から作をつづけて32年には雑誌『学窓余談』に宮古島の物語詩「嘉播の親」を発表し、34年に処女詩集「露じも」を公けにした。粗雑で含蓄に乏しく想像力さえ極めて貧弱な彼の詩風はこの時既にうかがわれるが「寝釈迦の渡」に譚歌を試みたり、種々なる異なった題材に新興趣を呼ぼうと試みたり、後半生に色々の思想や主義の主張と宣伝に、いちはやく身を投じたあの性急な建設者の風貌のひこばえに早くここにも現われるが、詩そのものは一として取るに足るものはない。」（明治大正詩史）

至極手きびしい批評である。「想像力が貧困だ」という評価は、一般的にいて自然主義文学全般にいえる事である。この文学は、むしろ想像力を排除したところに存在するとも思える。また、〈写実主義〉は、叙事詩とつながる。ロマン的思考者の日夏耿之介から見れば、泡鳴の「嘉播の親」はイメージの膨らみがなく、「粗雑で含蓄に乏しい」のであろう。しかし、泡鳴は、それをよく承知で書いたと思う。外国文学や日本の古典にも知識が豊かであった泡鳴は、自作にあまりにも方法意識を反映しようとした。そのために、返って作品の構成を乏しくしたのかも知れない。

泡鳴が材料に取ったという『宮古島旧記』というのは、明治17年6月に刊行されたものであろう。この年、沖縄県令西村捨三と内務省御用係後藤敬臣が、官公物として出している。それを、どこどのようにして泡鳴が入手して、眼を通したのかはわからない。また、何故、泡鳴がこれを素材に詩にしようとしたのかがわからない。あるいは当時の政治社会状況に宮古島農民の人頭税廃止運動があり、帝国議会でそれが審議されるという事があったので、泡鳴の耳目に、〈宮古島〉が少し知覚されたのかも知れない。だが、それは偶然の識見であったろうし、それほど南島に興味を持っていたとは思われないので、やがて意識の彼方へと霧散したのだろう。この作品の意味性を強いてあげるとすれば、「此著を母君の靈前に献ず」と書いてあるところからみて、靈鎮めのつもりで書いたかも知れない。

（まつばら としお：閲覧係）

## 特殊資料の目録カードが出来ました

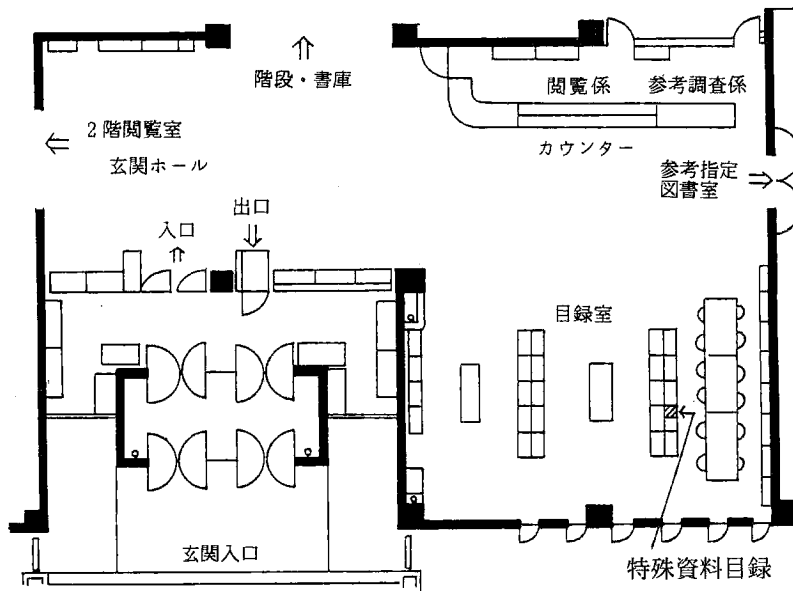
マイクロフィルムなど、図書以外の特殊資料の閲覧目録カードが出来ました。2階閲覧目録室に置かれています。マイクロフィルムに関しては、当面は52年度受入以降の約3千巻に関してのみですが、それ以外の資料に関しては、原則として全対象資料の分類目録と題名目録が出来ています。カードの記入は原則的には次頁のようになっていますが、例外も多いので詳しくは係員にお尋ね下さい。利用手続きに関しては参考調査係カウンターでお尋ね下さい。

個別資料についての注意

マイクロフィルム：52年度以前受入の分類及び題名目録カードに関しても順次整備していく予定です。分類目録カードは分類体系の都合上、郷土資料と非郷土資料の二本立てになっていますので注意して下さい。マイクロフィルムの大部分は郷土資料ですが、郷土資料の51年度以前に受入された分は冊子体の郷土資料目録に掲載されていますので、それを利用して下さい。

録音テープ：請求番号欄に分類番号が記載されているものがあります。テープ資料としてではなく図書として受入れられたものの付録として扱われているテープです。この場合には分類番号と書名で請求して下さい。

位置図



目録カード 例

	(1) 請求記号 (受入番号)	(2) 分類
	題名	
M 3969	勝連町地籍図 明治三十六年	K 345.43 Ka 88
	那覇 沖縄マイクロセンター	1982
	マイクロフィルムリール1巻	
	(119フレーム) ネガ	9.1 cm 35 mm
58 1. 5	内容：勝連町役場所蔵勝連町旧地籍図	
	全図・小字図	○
受入月日	(3) 所在情報	



## 目録カード説明

(1)請求番号：受入順に与えられた記号です。資料の請求にはこの番号を利用して下さい。先頭の記号は資料区分を示します。資料区分は以下の通りです。

E = 映画フィルム      F = マイクロフィッシュ      M = マイクロフィルム      S = スライド  
T = 録音テープ      V = ビデオテープ

(2)分類：通常は日本十進分類法（NDC）6 A版，K（郷土資料を示す）がついている場合には郷土資料分類法に従っています。

(3)所在情報：この欄に(研)の印があり教官名が記載されているものは当該教官の研究室に別置されています。また録音テープ（T）でこの欄に(指)の印があるものは閲覧カウンターで保管されています。

（本郷 清次郎：整理係）

## 西脇昌治文庫寄贈さる

本学海洋学科の創設に尽力され、また“クジラ博士”として国際的に知られた故西脇昌治元本学名誉教授の御遺族の御好意により、約 2,073点の蔵書が寄贈されました。

これらの図書は、理学部長の木崎甲子郎教授（前図書館長）のお世話により寄贈が実現したものであります。

寄贈本は、先生の著書「くじら」や「鯨類・鰭脚類」をはじめ、海洋関係の専門書、学会誌、また大変高価な「海の百科」（全20巻）などであります。

図書館では、できるだけ早めに整理をすませ、利用に供したいと思っております。

## 故伊波直朗教授蔵書本館へ寄贈

本学工学部電気工学科教授、伊波直朗先生は、長いこと病氣療養をつづけておられましたが、将来を囑望されつつ52才の若さで亡くなられました。こゝにつつしんで御めい福をお祈り申し上げます。

昭和35年本学に奉職以来、先生が収集された専門図書、学会誌など約1,300点が寄贈されました。そのなかには先生の学位論文“A Critical Analysis of Field-Strength Measurements at Frequencies Above 30 mc/s”をはじめ、Tralli, N. 著“Classical Electromagnetic Theory”や、訳書では、Bronwel, Beam 共著“極超短波工学”（Theory and Application of Microwaves）などの貴重書が含まれております。

## 〔本学教官著書寄贈コーナー〕

今回は、昭和59年5月29日より7月31日まで御寄贈頂きました分を掲載致します。（敬省略）

金城松栄（数学科教育）	「沖縄の数学ものがたり」 日本標準K. K. 1984
池宮正治（中国文学及び琉球文学）	「口承文芸研究 7号」 国学院大学 1984
篠原武夫（森林経理学・林政学）	「森林組合No.168」 全国森林組合連合会 1984
上江田捷博（化学）	「腔腸動物イワスナギンチャク 毒パリトキシンの構造研究」1984 学位論文 名古屋大学

## 学位論文・著作物等の寄贈についてお願い

これまでも何回かお願いして、沢山の文献をいただき、図書館資料の充実発展に御協力を得て、大変感謝しているところであります。

これらの資料は、学位論文が沖縄資料室に、また一般著作物が教職員著作物展示コーナーとして参考図書室にそれぞれ設置され、利用に供されております。

学位論文や著作物は、いずれも重要であるにもかかわらず情報不足のため、十分な収集ができていません。つきましては、学位を取得された先生および著書を発行された先生方は是非図書館に御寄贈（著書は2部）下さいますようお願い致します。

御寄贈いただいた資料は、永久に保存し、利用者に役立てたいと思いますので御協力のほどをお願い申し上げます。

（参考調査係）

## 映画フィルム・ビデオ等の資料提供 についてお願い

図書館では昭和57年10月以来、一般映画を上映してきましたが、今年度からは学術および教育的フィルムを、講義や研究資料の一助として映画会を実施しております。

しかしながら適当なフィルム等が少ないため、大変困っております。図書館運営委員の先生方によりますと、先生方の中にはフィルムやビデオ等をお持ちの方がいらっしゃるのお話がありました。これらの価値あるフィルムやビデオ等が教育や研究に活用されるのであれば実に素晴らしいことだと思います。

つきましては、これらのフィルムやビデオ等を提供して下さるよう御一報をお待ちしております。

（参考調査係 内線2143）

## 図書館・施設・設備の利用案内

図書館の施設・設備の利用案内については、新館開館と同時に“びぶりお”14巻3号（81年9月）に図面とともに御案内しましたが、あらためてお知らせします。

本館1階には、教官研究用個室（8部屋）をはじめ、演習室（42席）、視聴覚室（36席）、L.L.室（24席）、マイクロ・リーダー器（5台）があります。これらの施設・設備は、教職員はもとより学生の利用に供しております。

利用については、教官研究用個室が閲覧係で、その他については参考調査係で受付ておりますので御利用をお待ちしております。

(参考調査係)

## ブラウジングコーナー

### ムムウイアングッー（山桃売りの娘）

山桃は越來村・美里村（現在沖縄市）内に多く産したが、特に字小山・諸美里が名産地であった。このヤマチ（山内）、ムルンジャトゥ（諸見里）のアングッ（娘）たちが、ムム（山桃）を頭にのせて売り歩いたので、民謡にもヤマチ ムルンジャトゥ ヌ ムムウイアングッとしてうたわれ広く知られている。しかし実際に山桃を売り歩いたのは宜野湾村の大山・真志喜の女たちが多かった。山内や諸見里で山桃をパーキ（大きいざる、竹かご）に山盛りに買い頭にのせてその日は大山真志喜の自宅まで運び、翌朝暗い中に出発して、午前9時頃までには首里や那覇について売り歩くのであった。那覇まで運ぶ体力のない中年過ぎの女たちは、嘉手納まで運び、10人から20人分ぐらいのパーキを汽車（軽便鉄道、大山方言：ケービン）に乗せ、自分たちは歩いて那覇まで行き、那覇駅で受け取って売りに行くという方法をとっていた。1日中働いて労賃が50銭の時代だったから汽車賃の30銭は大きかった。又大山・真志喜の女たちが、山内・諸見里で山桃を買うときは、特別なやり方をした。1升枴にもり上げて、更にこぼれないように片手でささえ、他の片手で又もり上げるというやり方で、そのはかり方で2回分、すなわち2升で1升換算であった。これをウヤマーばかり（大山ばかり）といい、あやしむ者はいなかった。沖縄の農民には、チュクイムン（つくりもの：作物）は、天と地の恵みであるから、ケチケチしないという思想があったらしい。山桃でも九年母でも獲りつくすことはしないでいくらか残しておくのがならわしであった。結果としては小鳥の餌になっていたわけだが、はたして愛鳥精神から出たものかどうかはわからない。(T.Y. 閲覧係)

## 図 書 館 事 情

### 〔第156回図書館運営委員会〕

日時：昭和59年5月16日（水）9：00～10：00 場所：図書館会議室

- |        |                                   |
|--------|-----------------------------------|
| 議 題    | 1. 琉球大学附属図書館運営委員会規程の一部改正について      |
|        | 2. 琉球大学附属図書館医学部分館運営委員会規程の一部改正について |
|        | 3. 琉球大学附属図書館医学部分館利用規程の一部改正について    |
| 話し合い事項 | 1. 著作権法について                       |

〔第157回図書館運営委員会〕

日時：昭和59年6月20日（水）9：00～10：10 場所：図書館会議室

議 題 沖縄研究資料調査収集小委員会委員の選出について

報告事項 1. 昭和58年度沖縄研究資料の受入について

2. 文献情報センターについて

3. 昭和60年度概算要求について

4. 組織及び運営見直し検討委員会について

〈出張〉

○59年5月29日（火）事務長平良恵仁，昭和59年度国立大学附属図書館事務部課長会議出席  
東京，30日まで

○59年5月30日（水）分館長金城清勝，分館整理係長仲西盛秀，第32回九州地区医学図書館協  
議会総会出席，佐賀 6月1日まで

○59年6月13日（水）館長瀬名波栄喜，事務長平良恵仁，第31回国立大学図書館協議会総会  
出席，松山，16日まで

○59年6月21日（木）閲覧係長山田勉，ILISについて調査 シンポジウム出席，京都，  
23日まで

〈見学者〉

昭和59年7月21日（土），宜野湾高等学校生（30名）

〈来館者〉

昭和59年6月14日（木）日本開発銀行中央資料室参事山本氏

〈講演会〉第15回

昭和59年6月21日（木）

講演者：渡嘉敷綏宝（家畜繁殖学）琉球大学名誉教授

演 題：哺乳動物の生殖現象について

〈映画会〉第10回

昭和59年5月24日（木）

「光ファイバー・ケーブル伝送方式」，「衛星通信」見学者20名

〈その他〉

昭和59年7月6日（金）沖縄県大学図書館協議会総会

琉球大学附属図書館報“びふりお” 第17巻 第3号〔通巻第64号〕

昭和59年9月1日発行

発行人 平良恵仁 沖縄県中城村字南上原858

電話(09889)5-2221内線(2143)編集 参考調査係